５．開拓者の心や思いと川

① 開拓者たちの信仰※1

大津稲荷神社（豊頃町大津）。1830年に始まる。十勝神社（広尾町）に次いで古い。十勝内陸に向かう開拓者たちは、ここで今後の安全と平和を祈った。

（左）松光寺の不動堂（帯広市）。明治35年（1902）に晩成社が建てたお堂が残っている（場所は移された）。

帯広神社、秋祭りのみこし。

開拓は、なれない風土や自然とのたたかいでした。

開拓者たちの心は、苦しさや不安、そしてさびしさに、おしつぶされそうにもなりました。楽しみもなく、教え導いてくれるものもなかなか見つけられません。

そんな開拓者たちの心を支え、安らぎをあたえるものとして、寺や神社などがつくられていきました。

仏教は、とくに団体入植の場合、ふるさとで信仰されていた宗派がそのまま持ちこまれました。つらい暮らしのため、祖先をまつる意識がふるさとにいた時よりも大きかったといいます。

いくつかの地方から人が集まってくる大農場では、小作者※2それぞれの宗派とは関係なく、農場が決めた宗派から僧を送ってもらって説教所をつくりました。

（→ 団体入植・大農場　p166）

神社の祭りは大きな楽しみ

神社は集落や入植団体ごとに設けられることが多く、中には高さ３mほどの角材を仮に立てただけ、というものもありました。

開拓者たちの生活は、きびしい仕事に追われる毎日で、遊びや楽しみがほとんどありません。

春や秋におこなわれる神社の祭りは、信仰としての意味のほかに、村をあげての娯楽の場でもありました。

村人が集まり、故郷のおどりをおどり、出し物や競馬に喜び、開拓の苦労話に花をさかせて、一日を楽しく過ごしたといいます。

宗教と教育

明治16年（1883）、帯広に入植した晩成社の幹部たちは、キリスト教徒でした。そのため、内陸開拓が始まったころから、とくに帯広では、キリスト教の活動が始まっていました。

晩成社の渡辺カネは、移住するとすぐに開拓者の子どもやアイヌの子どもたちのための教育を始めています。キリスト教の宣教師が「教育所」をつくることもありました。

また、寺は人々が集まって学び、交流する場所ともなります。寺や説教所は、僧が先生となって子どもたちに教育する「寺子屋」や「簡易教育所」となることがよくありました（→p168）。

開拓初期には、宗教関係者が教育者※3ともなったのです。

明治31年（1898）、野村慈教が建てた説教所（池田町）。寺子屋教育もおこなわれた。　（写真：『池田町懐かしのアルバム』より）

※１　開拓者たちの信仰（かいたくしゃたちのしんこう）：この項目では、開拓者たちを信仰が支えたことについて述べています。宗教の紹介という意味では不充分であることをご了承下さい。

※２　小作者（こさくしゃ）：土地を借りて耕し、土地に割り当てられた小作料をはらう農民。

※３　宗教関係者が教育者（しゅうきょうかんけいしゃがきょういくしゃ）：今でも十勝には、仏教系の学校や幼稚園、キリスト教系の幼稚園などがある。

「馬頭さん」に馬への愛情をこめて … 十勝各地にある馬頭観音※4

十勝は馬の産地として有名で、「馬産王国」ともいわれました。機械化が進む前までは、馬はとても大きな存在だったのです。

開拓を進める中で、田畑を起こし、作物などの荷物や木材を運び、工事で働き、草競馬で、また戦争で、馬は大活やくをしました。

農民たちにとって、馬はただの家畜以上の存在でした。馬を人が住む家の土間に飼い、家族のような思いであつかったといいます。

こうした、大切な馬への思いから、十勝の多くの場所に「馬頭観音（馬頭観世音菩薩・馬頭さん）」が置かれています。

文字をきざんだもの、石の像、木ぼりの像、色をつけた像、中には馬に乗った観音像もあります。

馬を守るため、馬が死んだ時にその霊をなぐさめ感謝するため、また、戦場へ連れて行かれた馬の活やくと無事を祈るため、など十勝の馬頭観音にはさまざまな思いがこめられているのです。

（→ p 196）

帯広市大正町にある「新西国三十三番観音菩薩」の中の馬頭観音像。

新西国三十三番観音菩薩の位置。帯広市大正町東4線。

川の工事でも活やくする馬。（写真：『十勝川写真で綴る変遷』より）

もう少し細かいこと

神道の神々とカムイ

神道では、「八百万の神」といって、とてもたくさんの神がいます。ユダヤ教・キリスト教・イスラム教※5などが「ただ一つの神」としているのと大きくちがいます。

とくに、民間信仰では、さまざまなものが信仰の対象となっています。正月になると、鏡もちを供え、門松をたて、自動車から洗たく機、台所などにも正月かざりをつけます。これはものにも霊魂がこもるのだ、という思いがあるからです。

自然についても、水神、山の神、雷神、木の神、風神などがいて、それぞれがまつられ、祈りの対象となってきました。

どこか、アイヌの人たちの「カムイ」と似たところも感じられます。

神道は、かつて、大和朝廷、そして「日本」ができていく中で、各地の人たちが信じていた神々を組みこむことでできたのだろう、と考えられています。

和人の神々も、ずっと昔はカムイのようだったのかも知れません。

（→ カムイ p 134）

（上）自動車につけられた正月かざり。

（右）木を切る作業の前に、「山の神」をまつる。（豊頃町）

（写真：『豊頃町史』より）

※4　馬頭観音（ばとうかんのん）：もともとは、観音様が変身したすがたの一つで、迷いをなくし悪を破壊（はかい）する菩薩（ぼさつ）だった。それが、時がたつうちに、馬を病やケガから守る力をもつものとして、信仰（しんこう）されるようになっていった。

※5　ユダヤ教・キリスト教・イスラム教：これら３つの宗教は、呼び名はちがうが、同一の神を信仰する。ユダヤ教やキリスト教ではヤハウェ（エホバ）といい、イスラム教ではアラーと呼ぶ。

② 水の神、灯ろう流しや雨ごい

鈴蘭公園（音更町）下の河川敷にあるわき水。「不動明王」がまつられ、右写真のように「龍神の滝」の石碑もある。

和人にとっても、アイヌの人たちと同じように、川はありがたいものであり、そして恐ろしいものでした。

水の神である「水神」に対する信仰は古くからあり、水分神社などが水源地や川の合流点にまつられています（奈良県の吉野水分神社など）。

また、竜（龍）やヘビを水の神や川の神として考えることも多く、「八岐大蛇※1（８つの頭と尾を持つ大ヘビ）」の伝説は、支流を持つ川の洪水の話とも考えられます。

福井県の九頭竜川（→ｐ165）は、その名前から、「九つの頭を持つ竜」としておそれられていたことがわかります。

音更町鈴蘭公園の十勝川河川敷では、ガケからわき出る水が「龍神の滝」「滝の不動」※2として、まつられています。

灯ろう流し。

灯ろう流し

川の水や流れは、罪やけがれを清め流す、と考えられてきました。また、川の流れは死後の世界とつながっているとも考えられ、お盆には亡くなった人を思って供え物を流したり、灯ろう流しをしたりといった行事がおこなわれてきました。

鹿追町の然別湖や中札内村の恵津美川などでは、毎年、灯ろう流しがおこなわれています。

死者への思いだけでなく、川や湖をいつまでもきれいに、という思いもこめられています。最近では、そうした考えから、流しっぱなしではなく下流で拾い上げるようになってきています。

雨ごい

大雨による洪水とともに、雨が降らないことによる干ばつも、農業にとっては大きな痛手となります。

十勝でも雨不足が起きたことがあり、こうした時には、神に雨を願う「雨ごい」がおこなわれました。

昭和５年（1930）に池田町でおこなわれた雨ごいでは、数人がみの※3を着て笠※4をかぶり、然別湖（鹿追町）まで水をもらいに行きます。地元に残った人たちは、丘の頂上で祈りをしていました。

然別湖から水をもらった人たちが大森（池田町）に着いたとたんに大雨になったといいます。

美しい水をたたえる然別湖（鹿追町）。昭和の初めころは、やっと観光開発が始まったころで、今よりはるかに山おくであるイメージが強かった。

※１　八岐大蛇（やまたのおろち）：日本書紀（にほんしょき）などに描かれる神話の大ヘビ。スサノオノミコト（須佐之男命）に退治される。斐伊川（ひいかわ：島根県・鳥取県）のことだといわれている。

※２　不動（ふどう）：不動明王（ふどうみょうおう）のこと。仏教の信仰対象で、密教（みっきょう）の根本尊（こんぽんそん）である大日如来（だいにちにょらい）（またはその使者）が悪魔を降伏するために恐ろしいすがたをしたもの。その心はきびしくもやさ

③ 和人がつけた川の名前

明治29年（1896）発行の地形図。今の美生川は「ピパイロ川」であり、「美生」村には「ピパイロ」とふりがながしてある。

（国土地理院所蔵の1/5万地形図（帯広）を使用、着色）

十勝の地名や川の名前には、アイヌ語名に和人が当て字をした名前がたくさんあります。

例えば、「利別川」は「トゥシペッ」で「縄（ヘビ）川」、「札内川」は「サッナイ」で「かわく川」の意味です。「別」や「内」は、アイヌ語の「ペッ」「ナイ」（どちらも川の意味）に当てられた漢字なのです。（→p127）

中には、美生川や歴舟川のように、もともとはそれぞれ「びばいろ（ピパイロ：カワシンジュ貝・多い）」「べるふね（ペルプネイ：水・大きい・者〔川〕）」と読まれていたのが、あとで「びせい」「れきふね」と読み方が変わってしまったものもあります。

一方、和人が、新しく自分たちの思いをこめてつけた名前もあります。

音更町の矢部川と、幕別町の五位川。どちらの名前も、富山県から入植した開拓団体の名前からつけられた。

（国土地理院刊行の1/2万5千地形図（駒場・糠内）を使用）

開拓や特産品に関係する名前

幕別町には、糠内川支流に「五位川」が、音更町には然別川支流に「矢部川」があります。

「五位」は富山県からの開拓団体である「五位団体（伍位団体）」が入植したところに、また、「矢部」は富山県の「矢部団体」が入植したところついた地名です。どちらも、その場所を流れる川の名前にもなりました。（→p167）

また、開拓後についた地区名からついた川の名前としては、士幌町の「共成川」や「北開川」などがあります。

清水町の「御影川」は、御影という地名（もとは村名）からつけられたのですが、この地名は特産品の御影石（花こう岩）から名づけられたものです。石が地名になり、川の名前になったのです。（→p31）

人の名前も

暮らしていた人の名前がついた川や、その川の利用方法、あるいはその場所の自然からつけられた川の名もあります。

音更町の長流枝内川支流には、「小栗沢川」「林の沢川」「関根沢川」といった川があり、それぞれ、小栗さん・林さん・関根さんの名前からつけられました。

また、帯広市の「機関庫の川」は、かつてこの川から製糖工場の機関庫[※5]に水を引いたことから、こう呼ばれるようになりました。

そのほか、陸別町には利別川支流に「陸別熊の沢川」が、そのさらに支流には「熊泣川」「熊追川」など、クマが多かったことから名づけられた川があります。

地形図には小栗沢川や林の沢川はのっていないが、セキネザワ（関根沢）川はある。

（国土地理院刊行の1/5万地形図（十勝池田）を使用）

しいといわれる。
※3　みの（蓑）：伝統的な雨具で、ワラなどで作られたレインコート。
※4　笠（かさ）：伝統的な雨具で頭にかぶる。板、竹、イグサなどで作られた。
※5　機関庫（きかんこ）：機関車のための車庫。